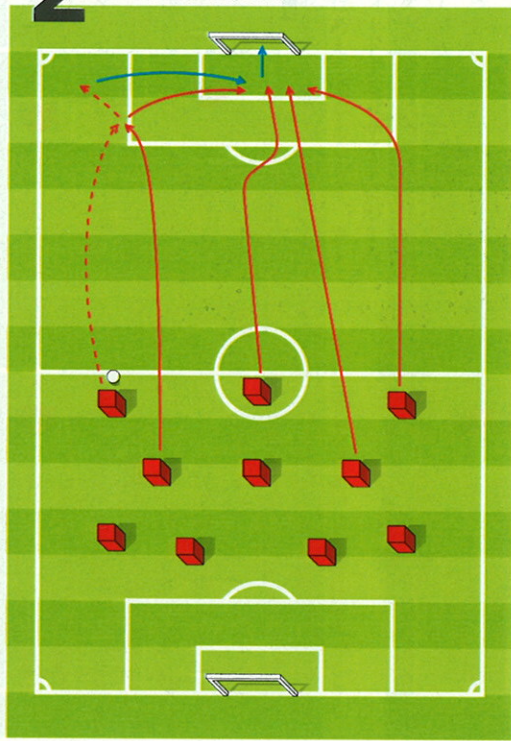
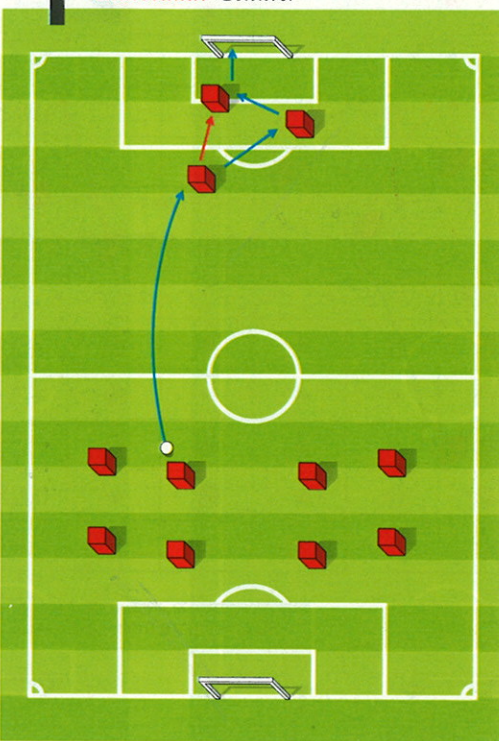


2 コレクティブ・カウンター
Collective Counter1 古典的カウンター
Individual Counter

「コレクティブ・カウンター」。今、最も旬なキーワードだ。よくあるサッカーの専門用語のようだが、言葉の重みは限りなく大きい。最先端をいく戦術を、見事に言い表しているからだ。ちなみに提唱したのは名将ヒディンク。彼は本誌の715号において、ユーロで台風の目となったロシア代表のサッカーを、次のように解説している。

「ロングボールを蹴ってカウンターを狙うのではなく、ハイテンポで、ショートパスをつないで相手ゴールに迫る。ポインントは1人か2人でカウンターを仕掛けるのではなく、5、6人が同時に相手ゴールに迫ることだ。コレクティブ・カウンター」はトータルフットボールの変形のひとつだと私は考えている」

ヒディンクが唱える「コレクティブ・カウンター」の斬新さは、単語の組み合わせの妙に集約されている。たしかに「コレクティブ（組織的）」にプレーするのは常識だ。守備を固め、ボールをすぐに前線にフィードするよう徹底していくのも「コレクティブ」な方法だといえる。そう考えれば「コレクティブ」と「カウンター」は必ずしも抵触しないことになる。だがこれまでは、単語を組み合わせたようにすると不具合が生じていた。

最初の問題は「数」だ。「カウンター」と聞いて多くの人が連想するのは、カテナチオで守り、敵陣に残った連中に「なんとかしてもらう」古典的スタイルだろう。ヒディンクも示唆しているように、攻撃にかかわる選手の数は1人か2人が関の山で、数少ないチャンスをものにできるかどうかは、FWの「個」に頼っていた。この種の方式は「インディビジュアル・カウンター」と呼ぶことができる。「コレクティブ・カウンター」と全く別物であることは誰にでもわかる。

二つ目の問題は、「コレクティブ」という言葉の含意に由来する。無論、単語自体は攻撃にも守備にも使うことができる。「コレクティブ」に「/」はベンゲルの口癖の一つだし、たとえカウンターではなくとも、バルサの試合で「コレクティブ・カウンター」。今、最も旬なキーワードだ。よくあるサッカーの専門用語のようだが、言葉の重みは限りなく大きい。最先端をいく戦術を、見事に言い表しているからだ。ちなみに提唱したのは名将ヒディンク。彼は本誌の715号において、ユーロで台風の目となったロシア代表のサッカーを、次のように解説している。

「ロングボールを蹴ってカウンターを狙うのではなく、ハイテンポで、ショートパスをつないで相手ゴールに迫る。ポインントは1人か2人でカウンターを仕掛けるのではなく、5、6人が同時に相手ゴールに迫ることだ。コレクティブ・カウンター」はトータルフットボールの変形のひとつだと私は考えている」

ヒディンクが唱える「コレクティブ・カウンター」の斬新さは、単語の組み合わせの妙に集約されている。たしかに「コレクティブ（組織的）」にプレーするのは常識だ。守備を固め、ボールをすぐに前線にフィードするよう徹底していくのも「コレクティブ」な方法だといえる。そう考えれば「コレクティブ」と「カウンター」は必ずしも抵触しないことになる。だがこれまでは、単語を組み合わせたようにすると不具合が生じていた。

最初の問題は「数」だ。「カウンター」と聞いて多くの人が連想するのは、カテナチオで守り、敵陣に残った連中に「なんとかしてもらう」古典的スタイルだろう。ヒディンクも示唆しているように、攻撃にかかわる選手の数は1人か2人が関の山で、数少ないチャンスをものにできるかどうかは、FWの「個」に頼っていた。この種の方式は「インディビジュアル・カウンター」と呼ぶことができる。「コレクティブ・カウンター」と全く別物であることは誰にでもわかる。

2, 3 or 4 positions (複数ポジションをこなせる多さ)

$$E = mc^2$$

Efficiency (効率性)

mobility (運動能力)

collectivity (組織力)



[戦術トレンド解析②]

「コレクティブ・カウンター」の衝撃。

ゼロトップのローマや昨季のアーセナル、そして今日のマンUやバルサ。欧州サッカー界のトップクラブは、常に新鮮な話題と衝撃を与えてきた。果たして次に彼らが目指すものは何か。選手たちに求められる資質とは。今夏のユーロで大番狂わせを演出したヒディンクの言葉を手がかりに、最先端をいく戦術のトレンドと、攻撃サッカーの進化の行方を探る。

'08-'09 Mode of Football

Attacking Europe

田邊雅之=文
text by Masayuki Tanabe
photographs by Tomoki Momozono

速攻	
コレクティブ・カウンター	インディビジュアル・カウンター ファンタジスタや クラッキによる一発勝負
組織	個人
パスゲーム、 ポゼッション志向	ファンタジスタや クラッキ、 パワープレー による局面の打開
遅攻	

組織&速攻の革新性

組織的カウンターという発想は、組織=守備、攻撃=個という文脈に対するアンチテーゼだっただけでなく、組織的攻撃=ポゼッション重視という常識にも一石を投じるものだった

敵の守備陣が戻ってしまふからだ。相手のコーナー付近からクロスをあがたいのなら、ウイングの位置に張った選手にいきなり中盤からフィードする。サイドにボールを叩いた場合にはあえて深くえぐらず、カーブをかけたボールをフリーポスト目掛けずぐさま放り込む。ゴール前に突っ込んできた3、4人の味方のうち、誰かの足に引っかかってネットに入ればもうけもの。うまくトラップしてゴールまで決められれば、120点満点という発想だ。このフィニッシュの形は、敵陣でパスをインターセプトして速攻に転じた場合にもしばしば使われる。

パスの長さや本数の違いこそあれ、狙いは「コレクティブ・カウンター」と共通する。要はいかに時間をかけずに（相手の守備陣が整う前に）、ゴール前で「スペース（シュートコース）」と「エクストラの選手（数的優位）」

を創りだすかに尽きるのである。組織が注目された攻撃と、個が脚光を浴びた守備。しかし選手や戦術がどんなに似通ってきても、チームの格差が消えるわけではない。同じシステムのチームが対戦した場合、両者の関係は速攻が始まるラインの差となって現れる。格下のチームは深めに身構える。格上で攻める気満々のチームは、自然に前がかりになっていく。今季のアーセナルに昨季ほどの切れ味がないことは、SBのポジション取りの微妙な違い、すなわちラインの後退にも見て取ることができる。リバプールに守備的なチームというイメージが付きまとうのは、慎重なベニテスがSBを上らせなかったため。似たような指標としては、セントラルMFの構成と配置も挙げられる。たしかに今季の

かつて選手に求められていた能力

	シュート	パス	ドリブル	フィジカル	運動量	守備
CF	●			●		
ST	●	●				
10番	●	●	●			
CMF		●		●	●	●
SMF		●	●		●	●

CF:センターフォワード、ST:セカンドトップ、CMF:セントラルミッドフィルダー、SMF:サイドミッドフィルダー

今日の選手に求められる能力

	シュート	パス	ドリブル	フィジカル	運動量	守備
CF	●	●	●	●	●	●
ST	●	●	●	●	●	●
10番	●	●	●	●	●	●
CMF	●	●	●	●	●	●
SMF	●	●	●	●	●	●

万能化が進む選手。表中にはないが、これはSBはもちろん一部のCBにさえあてはまる

$$E=mc^2$$

「コレクティブ・カウンター」の衝撃。



チェルシーが示すように、守備的MFの枚数がチームとしてのディフェンス力に直結しないのは事実だ。また昨季のCL決勝でみられたように、超一流のFW（ペス）が死ぬ気で前からプレスをかけ続ければ、失点のリスクはかなり減らすことができる。だがチームがどこまで前がかりになれるかは、やはり中盤で守備を受け持つMFの数と能力に左右される。4-2-3-1よりは4-1-1-4-1の方が腰は軽い、その分リスクは増えていく。よくいわれるとおり、スペインが攻撃力を活かしてユーロを制覇したのは、4-1-1-4-1の「1」として銃後を守ったセナ抜きには語れない。昨季のアーセナルで攻撃サッカーが開花したのも、フラミニの泥臭さがあればこそだった。

考えてみれば、ずいぶん大胆な話ではある。かつては中盤の底に、2枚のスクリーンを張るのが定石とされていた。チーム全体の守備という要素を無視すれば、フラミニやセナは、以前は2人分だと言われていた仕事を、1人で背負っていることになる。セスクのように10番の役割を担うようになった攻撃的MF同様、守備的なMFは、SBと共に最も早いスピードで進化している。

当然といえば当然だろう。攻撃指図が強まれば強まるほど、「ゼロトップ」や「コレクティブ・カウンター」のような戦術が普及すればするほど、チーム同士がせめぎあう中盤で守備をする人間の能力も上がっていかねばおかしい。あるいは攻撃に参加する選手の数が増えたからこそ、背中を支える守備的MFが重要になったというべきか。戦術と選手の進化によって、攻撃のパラダイムが「個」から「組織」に転換したように、守備においても「組織」の中の「個」が、改めてクロールズアップされる状況が生まれつつある。これら2つの化学反応が、表裏一体で起きていることは言うまでもない。その実ヒディンクも、「コレクティブ・カウンター」に但し書きするのを忘れなかった。

「注意して欲しいのは、カウンターでゴールできなかった場合、素早く選手たちはボールのうしろに戻って守備をするということだ」

諸々の変化を踏まえたうえで、今季はどのチームに注目すると面白いだろうか。ある意味、興味深いのはチェルシーだ。銀河系の彼方に飛び去ったミランを除けば、チェルシーは一番大きく様変わりしている。

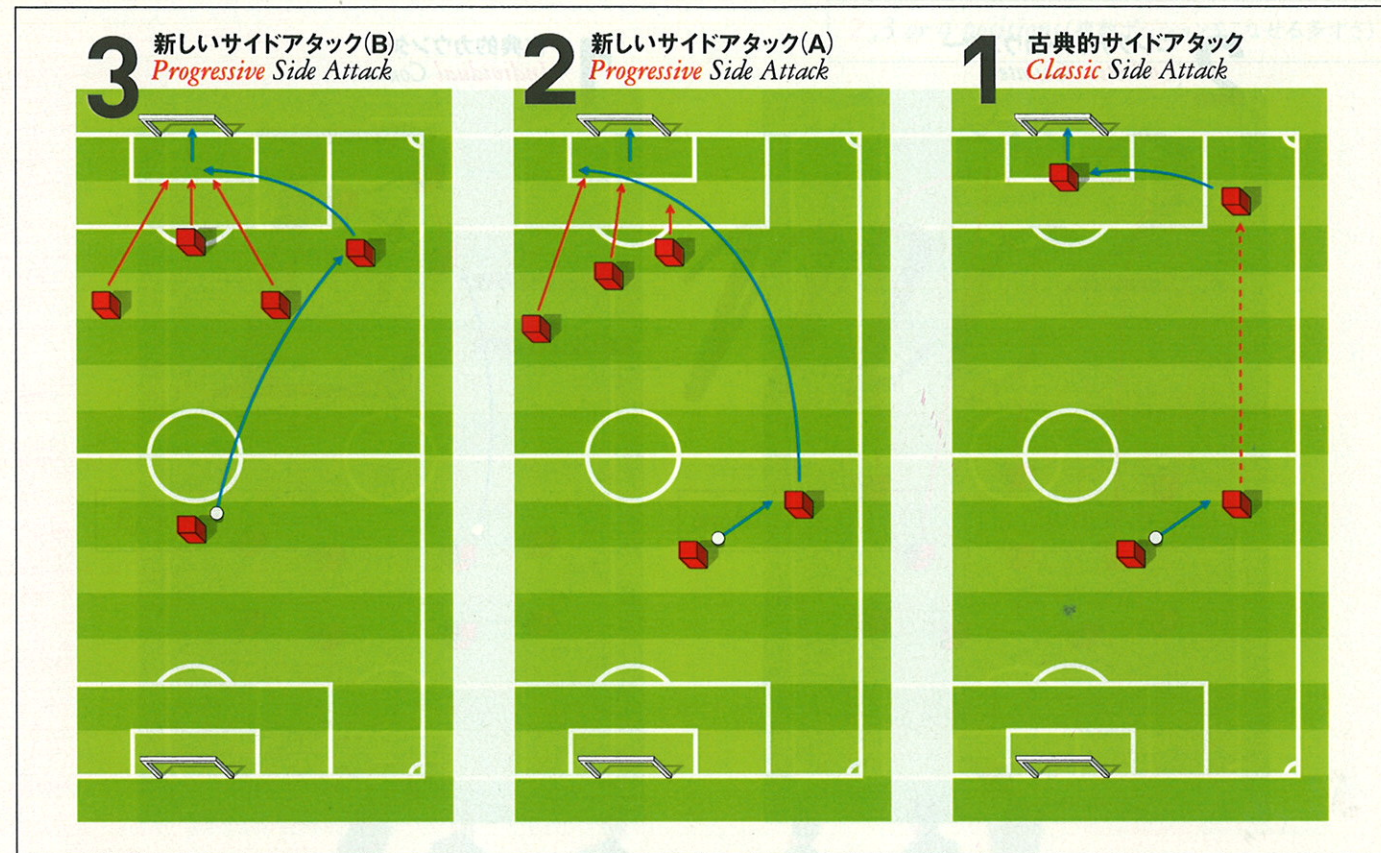
プレミアの残る3強は、アーセナルが半歩後退。リバプールも巡りめぐって4-2-3-1のまま。マンUの上積みはベルバトフ次第といったところか。大陸側でも顕著に変わったチームは多くはない。モウリーニョのインテルは期待したほど「スペシヤル」ではなかったし、ユベントスは「老婦人」というニックネーム並みの魅力しか持っていないことが判明した。地味なグアルディオラの元でバルサが派手さを増したのは特筆できるが、伝統的にいいサッカーをするクラブだという点では、これも予想の範囲内ではある。

ここ数年間のチェルシーは、近代サッカーの悪しき側面、フィジカルの高さやディフェンスの固さばかりが指摘される「ヒール」のような役回りを演じてきた。ところが今季は方針を一転、堅守速攻路線をひとまず置いて、攻撃では時間をかけてシュートパスをつなぎゲームを組み立てている。守備でもがちがいのラインを引くというよりは、懐深く構えるようになった。これはスピードアップ（フィジカルの上昇）や組織の強化といった進化のベクトルとは明らかに違っている。

それで結果が出なければ「退化」したということになる。だがプレミアではリバプールと首位争いを展開、とくに得失点差ではマンUにさえも大差をつけている。もちろん先進性II結果ではないが、この事実がサッカー進化論の枠組みの中で、どう解釈すればいいのだろうか。続きは今季の後半戦を見てのお楽しみ。案外、ヒディンク先生に意見を聞いてみるのもいいかもしれない。

Side Attack サイドアタック

図2は「弱者」が「強者」と対戦した際に多用される。図3はリバプールなどが好む方法。アーセナルのように、時間をかけてもパスを回してサイドから崩そうとするチームもある



返していた。今季はサハの後釜にベルバトフが加入し、この傾向がさらに強まった。11月末のマンチェスター・ダービー、終盤10人になったユナイテッドで、ベルバトフからCFの座を譲り受けたのはギグスである。ロナウドが昨季は目立たない感があるのは、ユニットの完成度が上がった結果だともいえる。

バルサも長足の進歩をとげた。メッシ曰く「ロナウジーニョとデコがいなくなったことで、パス回しが前よりもスムーズになった。足の速いメッシがCFの位置に躍り出るのは日常茶飯事だし、エトールはチームプレイヤーとして知られる。ウイングのアンリに至っては、CLも含めるとメッシの3分の1のゴールしか決めていない。それでいてチームは、リーグとCLでシーズン最多得点記録を更新することが有望視されている。

対照的にアーセナルは、そのアンリが抜けた昨季の方が明らかに美しかった。カペッロが「彼らの特徴は6人で攻め、10人で守ることだ」と指摘した通り、4-4-2や4-1-1-4-1が土台でも、試合中には事実上の4-6-0に移行する。両SBのクリシーやサニヤがチャンスに絡み、2-8-0に近い形になることさえあった。アデバヨールの強引なシュートに救われた試合も少なくはないが、ベンゲルは「個」と「組織」をかつてないほど高いレベルで融合させていた。

先駆者ローマが提示した、未来への可能性と条件。

さて、このような傾向を考えるとときに無視できないのはローマの遺産だ。'05-'06シーズン、ローマはFWのモンテッラが負傷でリタイア。監督のスペレッティは応急措置として10番のトッティを代役にたてたが、結果的には大吉と出る。本職のCFがいない「ゼロトップ」となったローマは、レンジの短い「ジョー・ポストプレー」と、トッティによる「セミ・ポストプレー」で活路を開き、CLの本戦の常連組に成長していった。

他のクラブが露骨に模倣したわけではないだろうが、ローマは「ゼロトップ」の可能性を示した。トッティのような花形を除けば、さして有名どころがないローマの成功は、中小のクラブにとつては福音となった。

と同時にローマは、現代のサッカー選手に求められる条件も明示した。驚異的なスピードとスタミナ（モビリティ）、高度の戦術理解度（コレクティブ・プレイ）、そして最低でも2つ、できれば3つ以上のポジションをこなす多才さ（バーサタイルティ）である。

オシムは最後の要素を「ポリバレンス」と表現したが、トップレベルのチームで「CF的なポジション」につく選手は、シュート力やポストをこなすフィジカルの高さだけでなく、ドリブルのテクニックや10番のようなパスセンスも備えていなければならない。中盤に陣取るMFには、CFばりの得点能力と、上下左右というポジションの違いを苦にしない柔軟性が必要になる。

4年前のインタビューで、ベルカンプは、「これからは、2人のセンターバックを除く選手全員がフレキシブルに動きながらプレーすることが、ますます求められてくる」とコメントしていた。昨季のアーセナルは、FWやMFばかりかSBにもオールラウンダーを揃えたからこそ、瞬間的にでも2-8-0の世界観を体現してみせたのである。

ならば、この種の選手を揃えた「ゼロトップ」のチームは、どう攻撃するのだろうか。「コレクティブ・カウンター」や「シュート・カウンター」は代表的な例だが、攻撃のアプローチの変化は、いわゆる「サイドアタック」の新しい形としても現れてきている。

SBがウイングのように上がり始めただけでは、たとえば一昔前のサイドアタックとは、センターラインの手前でパスを受けたサイドMFがタッチライン沿いをきちんとえぐってからクロスあげるイメージだった。だが、こんな光景は滅多にお目にかかれなくなっている。悠長なことをしている間に、